

高卒無業者の教育社会学的研究（2）

—大都市高校2年生調査の分析—

○耳塚寛明（お茶の水女子大学）

○粒来香（東京工業大学）

大道真佐美（お茶の水女子大学大学院）

諸田 裕子（お茶の水女子大学大学院）

小杉礼子（日本労働研究機構）

長須正明（東京都立工芸高等学校）

○堀有喜衣（お茶の水女子大学大学院）

序章 高卒無業者層へのアプローチ 問題意識と調査の概要

第1節 問題の設定

＜高卒無業者層の漸増＞

一般に高卒者が辿ることになる伝統的な進路は、第一に四年制大学と短期大学への「進学」、第二に直接実社会へと入る「就職」であった。これに70年代中葉以降、専修学校専門課程すなわち専門学校への入学が加わり、その後の鰻登りの入学者数の増加とともに第三の進路として定着してきた。事態に変化の兆しが現れたのは、90年代に入ってからである。90年代以降、高卒者の進路の中で、もっとも注目すべき変化をみたのは、いわゆる「高卒無業者層」の動向だった。「無業者」とは、高卒時点で、上級学校へ進学・入学する者、就職する者、死亡・データ不詳の者「以外」を指す。文部統計上のこのカテゴリは平成11年度学校基本調査速報版から「左記以外の者」に改称されたが、要するに、進学するでもない、就職するでもない者を指す。高卒者に占める無業者の率は92年の4.7%をボトムに漸増を続け、最新の99年には9.3%に至っている。実数にして12万7千人あまり、2000年春の卒業生に関してはほぼ間違いなく1割を超えただろう。

といってもこの数値は全国の全高卒者についてであって、全日制卒業者に比べて定時制卒業者で、また学科別には商業科や普通科で高いといった属性による差異がある。都道府県による差異も顕著で、沖縄県の27.4%は別格としても、神奈川県14.4%、東京都13.2%、宮城県13.1%から、3.1%の福井県、2.2%の富山県まで幅広く分布する。とりわけ無業者率が目立つのは、指定都市に所在する高校卒業生である。たとえばそのうちのひとつ、東京23区の公立高校男子卒業生を見ると（98年春）、卒業者約4人に1人が専修学校一般課程へと入学（23.4%、ほとんどは予備校）、これに次いで多いのが「無業者」（21.5%）である。無業者は、就職者よりわずかに多く、大学・短大進学者、専門学校入学者よりも数%多い。数値上、無業者は

第二の「進路」であり、5人に1人以上に及ぶもはや立派な多数派の進路となっている。

＜高卒無業者層漸増の背景：問題群＞

高卒無業者は、いったいどこで、どのようにして生み出されてきたのか、そしてそれはいかなる帰結を高等学校教育さらには全体社会にもたらすことになるのか—これが、本研究の主要な問題である。90年代以降、高卒無業者層が漸増してきた背景には、以下のような複数の要因が関わっていると考えられる。

①高卒労働市場の逼迫 90年代初期に150万人を超えていた高卒求人数は99年には50万人を大きく割り込むところまで激減した。高卒求人倍率は3.32倍（92年）から1.16倍（2000年1月現在）へと急激な低下を見た。各高校にとって実質的に意味のある求人数は、求人倍率の低下以上に深刻だったといわれる。こうした高卒労働市場の逼迫には、もちろん景気停滞がもっとも直接的な影響を与えているだろうが、1）高等教育進学率の上昇と平行に生起している、高卒から大卒への求人のシフト、2）非正規労働市場の拡大（パートやアルバイトによる労働力の調達傾向の高まり）の影響も大きいだろう。

②高校生文化の変容 先行研究によれば、90年代以前の高校生に比べていまの高校生は、生活世界全体の中での学校生活の比重が低下している。それは学習への構えが否定的になったり、学習時間が減少したりといった変化に端的に現れているのだが、ではどこへ彼らの生活関心が向かっているのかを観察してみると、学校の外、とりわけ消費文化へと接近している。学校生活へのコミットメントの低下、生徒役割から逸脱した生徒層の増加、消費文化への接近などが、青少年の進路形成や職業意識の形成、とりわけフリーター志望と関係している可能性がある。

③教育理念や進路指導の変容 臨教審以降の教育政策のベクトル転換によって、教育指導は、「個性重視の原則」へとパラダイム・シフトを経験した。20年前の教員に比べると、いまの高校教員は、一定の「高校生らしさ」の中に生徒たちを押し込

める指導を後退させて、「脱生徒役割」に対して許容的となった。進路指導に関しても例外ではない。進路未定の生徒でも希望がなければ強いて就職先へと押し込めようとはしない、非現実的な職業志望ではあっても生徒の希望を尊重する、保護者が子どものフリーター志望を認めていれば学校は積極的に指導しない・・・内発的な進路意識の高まりに期待し、生徒たちの「個性的な進路選択」を尊重し、結果的ではあれ「進路未定」や「フリーター」を正当化する方向へと、進路指導は変化しつつある。この変化は、個性重視の原則のもとで「自分探しの旅」を支援する進路指導として、より肯定的な意味を与えられることもある。生徒の「進路保障」が学校の至上価値であった時代は過去のものとなりつつある。

④家庭的背景 高校生の進路選択には、家庭的背景が密接に関わっていることがすでに知られている。近年の少子化等を背景とした高等教育進学率の上昇によって、これまでわが国の高校生の進路選択を枠づけてきたトラッキングが弛緩し、階層的な進路の選好が、進路選択に対する影響力を強めている可能性がある。高卒無業者の漸増は、日本社会全体の「階層再生産」という構造的現象のひとつの局面であり、同時に階層分化が鋭さを増していく、まさに中心的なできごととして理解されねばならない。

第2節 調査の概要

われわれは、こうした問題群に接近するために、以下の調査研究を行った。

- ①文部省学校基本調査および高校総覧（リクルート）を用いた、既存統計分析
- ②高校進路指導に関する教員インタビュー調査
対象：札幌市、東京都、富山県に所在する高等学校27校の進路指導担当教員27名。この3地域を対象としたのは以下のような理由からである。東京および札幌市は全国的に見ても無業者率が高い地域であるが、この2地域の無業者輩出のメカニズムは同じではない。同じ大都市圏でも東京に比べて札幌市は労働市場の状況が非常に悪いことから、札幌の無業者輩出には労働市場の要因が大きく関わっていると考えられる。一方富山県は全国の中で最も無業者率の低い地域の1つであるため、なぜ無業者率が低く保たれているのか、無業者発生のプロセスを比較する上で重要な地域である。
調査時期：1999年10月～2000年2月
インタビュー内容：進路指導の実態および無業者予備軍の特徴
- ③高校教員対象の質問紙調査
対象：札幌市、東京都、富山県に所在する高等学

校27校に勤務する本務教員426名。

調査時期：2000年2月～5月

調査方法：質問紙による自計式調査。

調査内容：進路指導活動および進路指導観

回収票の構成：性別<男性306名 女性115名>、年齢別<40歳以下164名 41歳以上234名>、学科別<普通科進学校78名 普通科進路多様校224名 専門学科101名>

④高校2年生対象の質問紙調査

対象：東京都に所在する高等学校21校に在学する高校2年生2476名。調査対象校は、相対的に無業者を多く出している、いわゆる進路多様校。地域的バランスと学科を考慮して対象校を選定し、調査を受諾していただいた高校を対象とした。

調査時期：1999年11月～2000年1月

調査方法：質問紙による集団自計式調査。（なお、2001年2月に、パネル調査を実施予定）

調査内容：学校生活及び校外生活の過ごし方および進路展望

回収票の構成：性別<男性1106名 女性1341名> 学科別<普通科1752名 商業科373名 工業科246名 農業科・家政科105名>、進路希望別<就職640名 フリーター91名 専門・各種742名 短大119名 4年制大学591名 その他69名 わからない205名>

第3節 本報告の構成

本プロジェクトは、以下の2件に分けて報告を行う。

- (1) 「高卒無業者の教育社会学的研究（1）無業者輩出校と進路指導の分析」 9月16日午前III-5 進路と教育（3）部会
 1. 無業者はいつから、どこから生み出されてきたのか（大道真佐美） 文部省学校基本調査及び高校総覧（リクルート）を用いて、いつから、どこで無業者が生み出されてきたのかを明らかにする。
 2. 無業者をめぐる進路指導と教育観（長須正明） 教員対象質問紙調査をもとに、進路多様校における進路指導、進路指導観を明らかにする。
 3. 進路としての無業者 教師の認識と指導「理論」（諸田裕子） 進路指導担当教員対象のインタビュー調査を用いて、無業者という進路がどのように教員によって認識されているのか、そして、無業者という進路がどのようにして納得のいくものとして見なされ、現場の「実践理論」として組織されているのかを記述する。
- (2) 「高卒無業者の教育社会学的研究（2）大都市高校2年生調査の分析」 9月16日午後IV-5 進路と教育（4）部会

東京都立高校2年生を対象とした質問紙調査の結果を用いて、以下の観点から分析・報告を行う。

1. 学校生活と進路展望 (粒来香)
 2. 青年文化と進路展望 (堀有喜衣)
 3. 進路分化の規定要因 (耳塚寛明)
- (耳塚 寛明)

第1章 学校生活と進路展望

本章では高校生の学校生活と進路展望との関係をみていく。学校生活へのコミットメントのありかたは各生徒の進路展望と深いかかわりをもつ。

第1節 トラッキングと下位文化

高校生の進路選択に関する従来の知見は、70年代末～80年代における調査・研究にもとづいた「トラッキング」メカニズムを中心としている。トラッキングのもとで生徒個人の進路は成績というメリトクラティックなメカニズムによって決定される(藤田1980、苅谷1983・1991、ローレン1988)。

さらに岩木・耳塚(1983)は、わが国の高校間格差構造がトラッキングシステムとして機能しており、生徒の下位文化とも対応することを明らかにしている。というよりも、各生徒は下位文化を通じて自分が属するトラックの価値を内面化させているのである。これまで多くの下位文化が発見されてきているが、社会化機能の観点からは「向学校的」「反学校的」「脱学校的」の3類型が重要であるとされている。高校生の学校生活と無業者輩出メカニズムとの関連を考察した長須(1997)は、学校生活へのコミットメントのありかた、すなわち下位文化に着目する必要を指摘している。

第2節 学校生活へのコミットメントの現状

最も基本的なコミットメントは、遅刻せずに毎日通学することである。2年生になってからの欠席日数・遅刻回数を見ると、1日も欠席していない生徒は40.8%に過ぎない。1回も遅刻していない生徒になると、わずか24.6%である。遅刻や欠席が常態化しており、基本的コミットメントの低下は明らかである。

基本的コミットメントの低下はなぜ生じるのだろうか。高校入学時の状況を見ると、「とくに入りたい高校はなかった」が最多で36.0%を占める。「本当は他の高校に入りたいかった」も27.3%にのぼる。彼ら/彼女らの中学時代の成績は、その多くが「真ん中くらい」から下である。今回の調査対象校では、こうした成績ランクからの「強く望まなかった」進学者が多くなっており、これが学

校へのコミットメント低下に結びついていると考えられる。

学業コミットメントについてみよう。81.1%が「少しでも良い成績をとりたい」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」としており、71.3%は「先生の板書をノートにとる」ことが「よくある」と回答している。その一方で「授業を集中して聞く」が「とてもあてはまる」は7.8%、「まああてはまる」が42.6%で、合計してようやく半数を超える程度である。さらに「家や塾で勉強すること」が「ほとんどない」生徒が76.3%に達する。

基本的コミットメント、学業コミットメントのいずれも低くなっているが、確信犯的な逸脱行動が多いわけではない。たとえば「校則を破る」に「よくある」と回答した比率は14.4%に過ぎない。また「教師に反発を感じる」が「とてもあてはまる」とする比率も16.2%にとどまる。学業コミットメントでは「向学校的」価値観は維持されながら、実際の行動はそれともなっていない状況といえよう。コミットメントの低下は「反学校的」文化というより「脱学校的」文化の現われであると考えられる。

第3節 進路展望との関係

ここでは、現段階の進路として「フリーター」を希望している生徒に焦点をあてて進路展望と学校生活へのコミットメントとの関係をみていく。

基本的コミットメントである欠席日数・遅刻回数をみてみよう。「フリーター」では欠席日数20日以上が非常に高く、10%を上回っている。遅刻回数については「フリーター」の20.9%が31～50回、18.7%が51回以上となっている。この程度まで基本的コミットメントが低下すると「高校生であり続ける」ことさえ難しくなる。中退者との重なりも考える必要がある。

事実、フリーター志望者の成績をみると、中学時でも現在でも、最下位の成績ランクを回答した比率が高くなっている。2年生になってからの赤点の和についてみても、7以上が11.1%にのぼる。こうした成績では、ほぼ確実に3年生に進級できず、原級留置が確定した段階で中退することが多い。その背景には、当然のことながら学業コミットメントの低さがある。「授業を集中して聞く」が「ぜんぜんあてはまらない」34.1%、「定期試験の前に勉強する」が「ほとんどない」34.1%、「家や塾で勉強する」が「ほとんどない」94.5%となっている。

それでは、こうしたフリーター志望者の下位文化は「反学校的」「脱学校的」のいずれなのであるか。「先生に反発を感じる」が「とてもあてはま

る」とする比率は19.1%で、進学や就職を希望している生徒と比較すると高くなっている。また「少しでも良い成績を取りたい」に対して「ぜんぜんあてはまらない」「あまりあてはまらない」とする比率が他の進路希望と比較して非常に高い。

第2節でみたように調査対象校の下位文化は全体としては「脱学校的」であるが、フリーター志望者では、学校的価値に対する反発がより強く、どちらかといえば「反学校的」な色彩が濃い。

なお「フリーター」の半数以上が高校入学時に「とくに入りたい高校はなかった」としている。フリーター志望者のように、高卒後の進路を「選択しない/できない」あるいは「熟慮しない/できない」生徒では、中学校卒業時にも明確な意識がないまま進路を選択していた可能性があろう。
(粒来 香)

第2章 青年文化と進路展望

第1節 はじめに

本章の課題は、都市部の進路多様校に通う高校生の生活や価値観が進路展望にいかなる影響を及ぼしているのかを検討することにある。従来の生徒文化研究においては、「Pupil's role」「Teenager's role」という2つの相反する役割が若者に課せられることに着目しながらも、基本的に若者が「Pupil's role」を担うことを前提とし、成績や学校ランク、その結果としての進路によって学校的価値に対する態度がどのように異なるかという問いが中心であった。しかし近年、こうした学校の準拠集団としての重要性が弱まっていることが指摘されている(大多和 1999 本田 2000)。このような知見は、高校に通う若者を、生徒役割だけでなく「Teenager's role」を遂行する存在として捉える視点の重要性を示唆している。そこで以下では若者が持つ価値観や行動様式のうち、特に校外にその準拠点を持つと思われる価値観や行動様式を「青年文化」と捉え、その内実と進路展望を明らかにする。

第2節 大都市進路多様校生の青年文化

はじめに大都市圏の進路多様校に通う高校生が校外でどのような生活を送り、どのような価値観を持っているかについてみていこう。

交友関係について検討してみると、都市部の進路多様校の高校生の交友関係は、自分の通う高校の中に制約されてはいない。学校の中に親しい友人はいるのだが、「学校の外にも親しい友人がいる」という者も93.1%にのぼっている。また「学校外の友人の方が気があう」という回答も48.1%

と半数近く、アルバイト先で仲の良い友人がいるという者も42.2%いる。校外に交際範囲を広げるのに役立つ携帯やPHSの所持率も75.2%となっている。普段学校で顔を合わせる友人は、彼らの交友関係のほんの一部にすぎなくなっている。次に生徒役割からの逸脱行動を見てみよう(以下の数字は「よくあてはまる」+「まああてはまる」と答えたものの割合)。「制服を变形したりスカートを短くする」のはおよそ半数であり、制服をきちんと着ないことがいわば「普通」の状態となっている。さらに「夜中にコンビニやファミレスに出かける」者も43.5%と、夜中に歩出く高校生は珍しくない。「目立つ髪型や色をしている」は19.2%と、学校の規則から完全にはみ出した生徒が2割を占める。かつて高校生の典型的な逸脱行動であったたばこやお酒も、「たばこを吸う」が15.0%、「お酒を飲む」という回答も30.7%と、逸脱の目安とするのは困難なくらい高い数字となっている。こうした知見は、今回の多くの調査対象者が、校外においてまた学校という場においても、生徒としてというよりは10代の若者として行動していることを示している。

さらに、過去2ヶ月のアルバイト経験率は58.9%となっているが、アルバイト経験者に対してアルバイトをする中で以下のような感想を持ったことがあるかどうかを尋ねた。

「お金を稼ぐのは大変だと思った」は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせると96.2%ときわめて高い。「バイトは楽だなと思った」も「あてはまらない」が63.7%となっており、「働くことの面白さを感じた」という回答も78.1%と高くなっている。総じてアルバイトは働くことの尊さを学ぶ上で有効な勤労体験といえよう。

しかしアルバイトは反面、フリーター志向を強める機能も果たしている。「バイトでも何とか暮らして行けると思った」という者は38.2%、「正社員になってもつまらないと思った」者も68.8%いる。アルバイトがフリーターを1つの進路と考えるきっかけをつくってしまっている傾向が見られるのである。先に見たように、アルバイト経験率がすでに2年生の段階で6割あまりになっているため、多くの高校生がアルバイトという校外での活動によって、こうした勤労観を形成する体験をしていることになる。このようなアルバイトの進路展望に対する影響力については後述する。

以上、大都市の進路多様校の高校生の青年文化について分析してきたが、時系列的なデータがないため以前の高中生との厳密な比較はできないにしても、交友関係の校外への広がり、および生徒

役割からの逸脱行動が多くの生徒によってなされていることが見出された。

第3節 青年文化と進路展望

本節では、青年文化への関与によって進路展望がどのような違いを見せるのかについて検討する。はじめに青年文化の基本的な要素として、アルバイト経験と交友関係について見てみると、第2節で確認したように、過去2ヶ月のアルバイト経験率は58.9%となっている。進路希望別に見てみると、フリーター希望者のアルバイト経験率は71.4%と高くなっている。最も低いのが短大・4大進学希望者であるが、それでも経験率は半数を超えている。

交友関係については、「学校外の友人との方が気が合う」とするその他の進路希望者は6割に達している。次にフリーター希望者が続いており、フリーター希望者与其他希望者の交友関係は校内よりも校外で深くなっている。他方、最も交友関係が校内に限定されているのは短大・4大希望者である。さらに交際範囲を広げるツールである携帯等所持率は、フリーター希望者の場合ほぼ9割に達している。このように校外生活における交友関係を進路希望別に見ると、短大・4大進学希望者に比べてフリーター希望者或其他希望者の交友関係は、校外においてより広くなる傾向が見られる。交際範囲を広げるきっかけとなるアルバイト経験率や携帯所持率も、こうした層で高くなっている。

次に校外での行動範囲を大きく左右する収入および収入の使い道と、進路展望の関連を検討する。進路希望別に主な収入源を見てみると、2ヶ月平均のアルバイト代が最も多いのは就職希望者で8万円を超えており、フリーターが7万7千466円と続いている。これに両親からもらうおこずかいが加わるわけであるが、小遣いが最も多いのは進路が「わからない」であり、逆に最も低いのはフリーター希望者である。実際に使う額を見ると最も多額なのはフリーターである。消費額は3万1千882円と他の進路希望者に比べて飛びぬけており、最も消費額が少ないのは短大・4大進学希望者である。全体の傾向として高校生の懐はかなり豊かであるが、とりわけフリーター希望者の消費活動は活発である。

続いて生徒役割からの逸脱行動の違いを進路展望別に見てみよう（以下の数字は「よくあてはまる」+「まああてはまる」と答えたものの割合）。「制服を變形したりスカートを短くする」という項目では、フリーター希望者が63.6%と最も高く、其他希望者が47.7%、専各46.8%、就職46.5%、

短大・4大希望者が36.6%と最も低くなっている。「夜中にコンビニやファミレスに出かける」という項目においても、フリーター69.0%、其他希望者62.3%、わからない51.5%、就職45.3%、専各44.7%、短大・4大34.9%である。「たばこを吸う」かどうかを尋ねた質問においても、フリーター希望者30.5%、其他希望者24.6%、就職希望者24.4%、わからない18.8%、専各16.4%、短大・4大希望者10.8%となっている。「お酒を飲む」という質問でも、フリーター希望者51.2%、其他希望者46.2%、専各希望者38.4%、就職希望者36.0%、わからない31.8%、短大・4大希望者28.3%である。こうした質問においては、フリーター希望者が最も生徒役割から逸脱した傾向を示し、次に其他希望者が続いて、短大・4大進学希望者が最も生徒役割に適切な行動をとっている。就職希望者や専各希望者、わからない者は、生徒役割—青年役割の軸上の中間に位置している。このように進路展望と逸脱的な文化の関連は維持される傾向が見られる。（以下は当日配布）

第4節 青年文化と成績・家庭的背景 <当日配布>

第5節 小括<当日配布>

（堀 有喜衣）

第3章 進路分化の規定要因

第1節 問題

このセクションでは、とくにフリーター志望に着目しつつ、高校卒業後の進路志望の規定要因を探ることとする。主として分析の対象とするのは、次の設問である。

「あなたがもっとも希望している卒業後の進路は次のうちどれですか。」

1. 就職
2. 家事・家の手伝い
3. フリーター
4. 専門学校・各種学校
5. 短期大学
6. 四年制大学
7. その他
8. わからない

このうち、「就職と家事手伝い」、「短期大学と四年制大学」、「その他とわからない」のカテゴリを統合して分析する。

高卒無業者の漸増をもたらした背景には、これを可能とする「豊かな」家計水準が存在すると考えられる。いわゆるフリーターという進路の選択肢は、(アルバイトによる収入が期待できるもの)「何とか食べていける」だけの家計の豊かさがあって、はじめて可能となる。この意味において、

少なくとも高卒者が主たる家計維持者となる必要がない程度にまでは、家計が豊かになったという基礎的条件が存在するだろう。

ただしそれは、その程度には豊かであるというだけであって、高卒無業者層が相対的に富裕な層から出現しているわけではけっしてない。事實はむしろまったく逆である。後に述べるように、保護者の職業や学歴の点で、相対的に低い階層からフリーター志望者は出現している。

そもそも、いまや高校から上級学校への進学は、威信の高い少数の四年制大学を別とすれば学力が決定的な重要性を持っているわけではない。むしろ、上級学校への進学を強く志向するある種の階層的意志の有無と、それに耐えるだけの経済力があるかどうか、進学か否かを決める重要なポイントとなっている。威信の高い四大へ進学できるのは教育費の支弁が可能でかつ学力の高い高校生であり、就職の狭き門を通り抜けることのできるのは進学希望を持たないまじめな(欠席や遅刻が少なく学業にもまじめに取り組んだ相対的に成績のよい)生徒たちである。威信の高い四大へ進学できずかつ就職も困難だった生徒たちの中で、教育費の負担が可能な層は、極端にいつて成績の如何や高校生活へのまじめな取り組みの有無に関わらず、進学することができる。教育費の負担が不可能な層にとっては、「進路未定」「無業者」「フリーター」という進路しか残されてはいない。こう考えれば、そもそも高卒無業者層が豊かな階層から出現しているなどということはある得ない。相対的に低い階層を出自とする生徒たちが、高卒労働市場逼迫の直撃を受け、さらに経済的理由から進学機会を奪われるという二重の「機会の喪失」の末に、高卒無業者となって、学校と職業世界の狭間にさまよい出ていく可能性が強い。高卒無業者の漸増は、日本社会全体の「階層再生産」という構造的現象のひとつの局面であり、同時に階層分化が鋭さを増していく、まさに中心的なできごととして理解されねばならない。

無業者たちを「自分探しの旅」に出ていく者たちとして支援しようとする進路指導や理念が存在する。しかし、誰が、どのようにして無業者(フリーター)として学校と職業世界の狭間にさまよい出ていくのかを注意深く観察する必要がある。階層再生産問題としての性格がそこに見いだされるとしたら、私たちが求められているのは、彼らを美しい言葉だけで支援することではなく、機会の喪失に対処する制度的施策—たとえば奨学金制度などの経済的支援だということになる。

このセクションでは、こうした問題関心と仮説に基づいて、実証的な検討を行う。

第2節 社会的背景、属性別にみた進路志望

進路希望と、これを規定すると考えられる変数群との関連を示したのが表5-1である。表5-2は、表5-1をもとに、各進路志望選択肢の中で出現率の高いカテゴリと、出現率の低いカテゴリを示した。(図表省略)

1. フリーター志望と関連の強いのは、①母学歴・中学校、②父学歴・中学校、③今の成績・下のほう、④中学校卒業時の成績・下のほう、⑤父職・自営業、⑥父職・工員・現場作業・販売・職人である。逆に、成績上位者、父職・管理・専門・事務などは、フリーター志望率が低い。

2. 短大・四大志望は、成績上位層と高学歴層、ホワイトカラー層から出現している。すなわち、①中学校卒業時の成績・上のほう、②母学歴・短大・大学、③父学歴・短大・大学、④父職・管理職・事務職・専門職、⑤今の成績・上のほうで、短大・四大志望率が高くなっている。

3. 就職志望率が高いのは、①学科・専門学科、②中学校卒業時の成績・下のほう、③今の成績・下のほう、④性別・女子である。逆に、高学歴層、ホワイトカラー、普通科で就職志望率が低い。

4. 専各志望率が高いのは、①父学歴・専各、②母学歴・専各、③経済的豊かさ・まあ豊かである。

(以下、当日の報告資料に記載する)

(耳塚寛明)